

小学生のまる六年、ケニアにいました。父が商社に勤めていたんです。当時は大使館の関係者を合わせても、日本人は三千人ほどしかいなかった。それでも僕たちを呼び寄せたのは「一緒にいて家族なんだ」という父の強い思いだったのでしょう。

### 人生楽しんだ父

父は、今、何を一番大切にしくちやいけなかないかということを考える人でした。座右の銘が「フルスイングの人



生」でしたから。家族思いではあったけれど、まず自分がきっちり楽しむという姿勢でした。仕事も楽しんで。ケニアの広大な自然の中で遊び、僕たちもいつのまにか楽しんでる。押しつけがましきはないんだけれど、いい意味で背中を見せてくれました。帰国したとき、僕は小学三年生程度の学力しかなかったけれど、父は「そのうち追いつくだろう」と。本当に基本線がしっかりしていました。

中学、高校時代は男子校の

## 感動共有しつつながる

医師

岩室 紳也さん

寮に入っていました。家族は父の赴任先のタイへ。大学受験はもとも京大工学部志望だったんですが、お世話になった寮の舎監の奥さんに「岩室君は医者に向いているんじゃないの」と言われて、自治医大も受けました。両方受かったんですが、人を相手にする仕事は嫌じゃありません。父は「お前が決める」と言われました。それで医師になったわけです。

妻とは大学時代に知り合っ、学生結婚まで考えたのですが、ルールは守れという父の教えもあって、卒業して医者になって結婚しました。家族と離れていた時期が長かったから、早く家庭がほしかった。家に帰って、一緒にご飯を食べる。話題を共有できる人がいる。そこには感動があります。だから、今でも必ず朝は妻と一緒にご飯とみそ汁を食べる。それが生きる力になっています。

ママの広場

るかというところ、感動の共有でしかない。ただ血のつながりのできるものじゃない。学び合い、ストレスも抱えながら、時間をかけてつくられていくものです。互いを認め合うことですね。僕の趣味と彼女の趣味は全く違って、僕は機械いじり、彼女は読書なんです。でも、あなた最近本読んでないでしょ。なんて言われるんですよ。他人に言われたらカチンと来ますよね。でも、信頼関係があるから「じゃあ読んでみるか」となる。そこで感想を話し合うと、また違う発見がある。だから僕たちはしょっちゅう会話をしています。

### 死の意味伝える

父は八年前、肝臓がんで亡くなりました。最期は自宅でした。へき地の診療所にいたころ、在宅でみとった人たちは家族の満足度も高かった。病院でのみとりは寂しいです。父とは死ぬ二日前まで一

緒にビールを飲んで、普通に日常の会話をしました。本当にフルスイングの人生でしたね。いま、家族が死んでいく姿を見る子どもはほとんどいないでしょう。「命を大切に、伝わらない。講演で話をするときは、僕が大切さを学ばせてもらった具体的な事例を伝えていきます。子どもたちが聞きたいのは、そういうことでしょう。

妻には「あんたは現場を離れちゃだめよ」と言われてます。家族だからそんなことを言ってくれて、その言葉を受け止められる。とても感謝しています。

(聞き手・写真 田島真一)



いわむろ・しんや 1955年、京都市生まれ。地域医療振興協会ヘルスプロモーション研究センター長。全国各地で若者らにエイズや性などについて講演するとともに、神奈川県厚木市立病院泌尿器科で外来診療もしている。著書に「エイズ—いま、何を、どう伝えるべきか」(大修館書店刊)、友人で「夜回り先生」として知られる水谷修さんらとの共著「いいじゃない いいんだよ」(講談社刊)などがある。ホームページは、<http://iwamuro.jp/>

2006. 8. 18

中日新聞